何も知らない魔王♀と魔王は自分のものだと思い込んでいる勇者♂

体験版

がら堂／どん丸

【読む前に】

高校生を含む１８歳未満は閲覧禁止です。

この話はフィクションです。実在の人物や団体とは一切関係がありません。

なお、この話は犯罪行為を助長するものではありません。決してマネしないでください。

本書の内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を固く禁じます。

Unauthorized copying and replication of the contents of this book, text and images are strictly prohibited.

登場人物

●魔王

弱いものいじめはつまらないのでしないが、プライドが高いせいで世界で一番悪い奴みたいな態度をしている。

妖艶美女だが周りには恐れられたり尊敬されたりするばかりなので初心な処女。

●勇者

王子様みたいな美男子。脱ぐとすごい。この見た目でたくさんの人を救ってきたので世界中の女性に惚れられている。

基本的には善人で倫理観はしっかりしているはずだが、魔王に対してだけ頭のネジが外れる。

本編

「ふん。お前が勇者か？」

ラスボスのいそうなごつい城のごつい椅子にふんぞり返って座っているのは魔王と呼ばれる魔族の長である。魔族とはいっても人間とそう違うところはない。体力が有り余っているとか、力が強いとか、それくらいだ。人間からすればそれが強すぎるんだけど。

そしてこの魔王は女であった。身長は女にしては高く、グラマラスな体で、真っ赤な目はキツく唇はぽってりとしている。要するに妖艶美女だ。

魔王という立場と相まって男を何人も侍らせていそうではいるが、この魔王、実は男性経験がゼロだった。強すぎてそういう意味で男

が近づいてくることが全くないのである。魔族の男たちはシンプルにこの魔王を尊敬していた。

「君が魔王だね？」

そんな魔王の元にやってきたのが、勇者と呼ばれる男だった。田舎の村で生まれたごくごく普通な人間……と言いたいところだが、勇者は非常に強かった。それに目をつけた国の使者に勇者という身分を与えられ、世界中を回って世界を救う旅に出た。そしていろんな悪い奴を倒し、人々を助け、とうとう魔王の元にやってきたのだ。

ちなみにこの勇者、着痩せして見えるムキムキな大きな身体に太陽の光に輝く金髪、空色の輝く瞳と、「勇者っていうか王子様じゃね？」みたいなとんだイケメンだった。おかげであちこちで無意識に女を落としてきた罪深い男である。

「一人できたのか？」
「ああ君とは一人で会いたくてね」
「ふん、私との力の差をわかっていないようだな」
そう言いつつ、魔王は「こいつは強いぞ」と思っていた。種族的に個人個人の力の差では人間が魔族に叶うはずはないのだが、この勇者は違いそうだ。流石はここまでたどり着いただけある。
勇者は魔王に近づいてきた。座っている魔王の目の前に勇者が来ても、魔王はピクリとも動かない。
「なぜあんなことをした？」
「あんなこととは？」
「色んな村に魔族をけしかけ、人々を傷つけてきただろう」
知らん！　と魔王は思った。何せ他の魔族が勝手にしていること

なので。魔王は一応魔族の長ではあるがただ魔族の中で一番強いってだけなので、他の魔族にあれしろこれしろとは一切言っていない。魔族は個人主義の集まりなのだ。

しかしそれを馬鹿正直に勇者に言うのもなんだか舐められそうで嫌で、魔王はニヒルに笑ってみせた。

「上等種が下等種を蹂躙するのに理由がいるか？」

実は魔王は自分より弱いものを蹂躙するのはつまらなすぎてわざわざやりたいと思わないためそれをやったことはないのだが、やっぱり勇者に言うのは嫌でそんなことを言ってしまう。

「……なるほど」

神妙に頷く勇者に、魔王は眉間に皺を寄せる。

「じゃあ、俺がそれをしてもいいんだね？」

「は？　……っ！」
勇者の青い瞳を見た瞬間、魔王の身体がぐらりと揺れた。椅子から落ちそうになったのを、勇者が抱きしめて支える。男にそんなことをされたことのない魔王の身体はピクリと震えた。
（私に効くとは、こいつ、強いぞ……！）
全く動けずに勇者の腕の中で固まっている魔王は驚いた。これは目を見て発動する魔法だ。催眠に近い効果があり、非常に強力な魔法ではあるが、自分より強い者には効かないという弱点がある。それが効いたということは、勇者は魔王より弱くない、ということだ。
「場所を移動しようか」
「っ！」
勇者は動けない魔王を抱き上げた。お姫様抱っこで。そんな抱か

れ方をした魔王は泡を吹きそうになった。
そうして魔王が意識をちょっと飛ばした瞬間、勇者は魔法で空間移動した。そこは（人間的には）ごく普通の部屋で、勇者は魔王をベッドの上に下ろした。いまだに動けない魔王は、ギロリと目だけで勇者を攻撃するように睨みつけて、口を開いた。目と口は動くらしい。
「貴様、なんのつもりだ」
魔王の問いに、勇者はにこりと笑った。爽やかな笑みだ。これで無意識に何人もの女を落としたわけだが、魔王はこんな状況で宿敵ともいうべき相手に落ちるほど馬鹿ではない。
「君を蹂躙しようと思って」
「は？」

「俺は魔族のことを下等種だとは思っていないよ。もちろん他の種族もね。だから、君にも教えてあげる」

爽やかなだけだった青い瞳に不穏なものが混じって、魔王はゾクリとした。こんな感覚は生まれて初めてだった。魔族としてではなく、女としての本能が勇者に怯えたのだ。

「生き物は皆平等なんだ。君たちは肉体的には確かに強いだろうけれど、人間だって強い。君は自分が絶対的に上の存在だとでも思っているみたいだけど、それは間違いだ」

「何を……んむぅっ⁉」

勇者の端正な顔が近づいてきて、遂には、魔王は唇を塞がれてしまった。しかも、開いていた口の中に何か熱いものが入ってくる。

「ん――っ！」

初めての感覚に、魔王は口は動かせるはずなのに拒否できずに、されるがままになってしまう。ぬるりと上顎や歯列をなぞられて、ぞくりとする。舌と舌とが絡み合う感触に、頭がくらくらしてくる。

「んぁ……んん～っ……」

引っ込もうとする舌をに無理やり舌を絡ませられ、執拗に舐められる。息ができなくて苦しい。酸欠になりそうだ。

さてこの勇者、基本的には善人で勇者としてダメなところなど一つもないように見えるが、実はたまに頭のネジの外れるヤバい奴だった。しかしその「たまに」は全て魔王に対してで、旅を始めたころからちょこちょこ聞く魔王の存在に、段々並々ならぬ感情を抱いて行ったのである。勇者は人間としてはちょっとおかしなくらい強いし、見た目も良すぎるし、自分って何なんだろう、と思い悩むこ

とがあった。そこで知った、世界最強とも言われる魔王の存在。まるで自分の為に存在するように感じてしまって、その思いは段々ヤバい方に強くなっていった。ぶちのめした敵が「お前なんて魔王様にかかれば一瞬で終わりだぞ！」なんて言えば、にっこり笑って魔王の情報を聞き出した。搾り取れるすべてを。やり方はあえて言わないが、勇者の仲間たちはそれを見て失神したり吐いたりした。勇者の自称ライバルが「魔王は俺が倒す！」と言えばまたにっこり笑って「魔王は俺のだから。手出したら〇〇する」と穏やかに言い聞かせ、自称ライバルは失禁した。そして、魔王が女だと知った時にはいつも微笑んでいるがそれにしたってヤバいくらいのニッコニッコ顔で、仲間たちは宿敵であるはずの魔王に同情した。

そんなわけで、魔王はこんな目に遭っていて、これからとんでも

ねえことをされるわけである。
魔王の目尻に涙が浮かぶ頃になってようやく勇者の顔が離れる。二人の間を銀の糸が繋ぐ。それを魔王が呆然と眺めていると、勇者はまた爽やかに笑った。
「抵抗しないのかい？」
「はっ？　なっ！　お、お前が私の動きを止めているんだろう！」
「口は動くはずだよ？　舌を噛みちぎるくらいできたと思うけど」
「なっ、なっ、なっ……！」
「……君は、思っていたより可愛らしい人みたいだ」
「馬鹿にするなっ！」
顔を真っ赤にする魔王の頬を撫でた勇者は、もう一度軽くキスをした。そしてそのまま魔王の首筋に吸い付く。

「ひっ！　な、何してるんだっ！　貴様、まさか吸血種なのかっ⁉」
「違うけど、魔族はこういうことをしないのかい」
「し、知るかっ！　離せっ！　……ひゃうっ！」
首筋に何度も吸われて、魔王の声が高くなる。勇者はそれを面白そうに見つめながら、服を脱がせていく。
「な、何してるんだ、この変態っ！　やめろっ！　やめろってばっ！」
「まだ自分が上の存在だと思ってる？」
にこにこ笑う勇者は今やただの強姦魔である。
あまり多くない布面積の服を剥ぎ取られ、魔王の豊満な乳房が露わになってしまった。
初めて異性に身体を見られてしまった魔王は、羞恥に白い頬を真

っ赤に染めた。世界中が恐れる魔王は、強姦魔に犯されかけてる初心な処女だ。
「ひっ！　か、返せっ！　見るなっ！」
「綺麗だよ」
「うるさい黙れっ！」
喚く魔王を無視して、勇者はその胸に触れた。柔らかいそれを下から持ち上げるように揉み上げ、乳首を指先で弾いてやる。
「あっ……ふあぁっ……」
「気持ちいいのかな」
「ち、違っ……」
「でもここはすごく硬くなってるよ」
「やぁっ♡」

ピンッと尖った突起を摘まれて、魔王は声を上げた。初めの感覚と自分から出た甘ったるい声に、魔王は戸惑いを隠せない。
「可愛い声だね」
「絶対殺、んぁっ♡」
こりこりっと硬くなった先端を擦られれば、言いかけた言葉も甘い吐息に変わる。
「はぁっ……んっ……♡　それ、やめろぉっ……」
「どうして？　こうされるの好きなんじゃないの？」
「こんな身体変にさせられて、どうして好きになるんだっ！　馬鹿かっ！」
「……」
魔王の反応に、勇者は固まった。

「……君、まさか、男を知らないのか？」
「な、な、な、そ、そんなわけないだろっ！」
真っ赤な顔でどもりながら言う魔王に、勇者はまたしても固まる。無意識だろうが、若干怯えを見せながら上目遣いで見つめてくる魔王に、勇者は片手で顔を覆った。
「……わかった」
手を離した勇者の目は、すわっていた。
「優しくする」
「な、なにを、んんっ！」
再び口を塞がれて、口内をゆっくり蹂躙される。先程よりも深く濃厚なそれに、頭がぼうっとしてきた。
「ふぅっ、んむっ、はっ……んっ……♡」

「んっ、ちゅっ、はぁっ……はは、やっぱりかわいいな」
「なっ、何を馬鹿なことをっ、あっ♡」
ちゅうっと音を立てて胸の先端に吸いつかれ、魔王はびくりと震えた。
「な、なんでそんなところ、ふぁっ♡」
「おいしい」
「なん、んんんっ♡」
舌で転がされて、時折強く吸われる。もう片方を手で弄られて、魔王は初めての快感に腰を揺らしていた。
「やめ、あっ♡　絶対殺、んぁあっ♡」
「本当にそう思ってる？」
意地悪く言う勇者に、魔王は「殺す殺す」と喘ぎながら言うが、

全く説得力がない。むしろその態度が勇者の加虐心を煽っているのだが、本人は全く気づいていないようだ。
「もうやめろっ、この変態っ、絶対殺す、絶対殺すからなっ！」
「もうこんなになってるのに？」
「ひゃんっ！」
膝をぐりぐりと股間に押し付けられて、魔王が悲鳴を上げる。相変わらず口と目以外動かせない魔王は、拒否できない。
「や、やめろってば、あっ♡」
「直接の方がいい？」
「え？　あ、待っ……！」
スカートの中に手を突っ込まれて、魔王は焦った。だがもちろん動けず、そのまま下着を引き摺り下ろされてしまう。

「なっ、何、な、な、へ、変態っ！」
「褒め言葉だよ」
「馬鹿なのか貴様は！　見るな見るな見るなっ！」
暴れられない魔王は叫ぶだけしかできず、勇者は目を細めてその様子を眺めていた。
勇者は一旦身を離し、自分の服をくつろげた。魔王の周りにいる魔族に比べれば細く見えた身体は脱ぐとすごくて、魔王の女の部分が反応してしまう。
「……やっぱり綺麗だ」
「見るなって言ってるだろっ！」
魔王の抗議を無視して、勇者は魔王の腰から太ももをするりと撫で上げると、その足を掴んだ。そして大きく広げさせて、その間に

割って入る。
「や、やめ……」
「大丈夫だよ。優しくするから」
流石に怯えを見せ始めた魔王に勇者はにこりと微笑むと、魔王の割れ目に顔を近づけた。
「ひっ！　そ、そんなところ、ひぁっっ♡」
熱いものが触れたかと思うと、べろん、と舐められる。生まれて初めて感じる刺激に、魔王の頭は真っ白になった。
「んなっ、きたないからっ、やぁっ♡　んんーっ♡」
ぴちゃぴちゃという水音が響き始め、魔王は嫌がるが、それは逆効果だった。
「やぁっ♡　あっ♡　殺す、殺すっ……♡」

「凄い溢れてるよ」
「ひぁっ♡　な、なにが、あぁっ♡」
指で広げられ、中まで舌を差し込まれる。とうとう魔王の目には涙が浮かんだ。
「あぁっ♡　やめろ、やめろっ♡」
「ここ気持ちいいんだ」
「ちがっ♡　ひぁっ♡　変なのくるっ、やだ、やめろっ♡」
必死に訴えても勇者は止まらない。それどころか動きが激しくなり、魔王の限界はすぐそこまで迫っていた。
「イキそう？」
「い、イクって何、あっ♡」
「ははは、それもわからないんだ」

「な、馬鹿にしてるのかっ、んぁっ♡　やめろ、ほんとにやめっ、ああ――っ♡♡♡」

じゅるるっと音を立てて吸われ、魔王は達してしまった。勇者は顔を上げて、満足そうに魔王の愛液で濡れた唇を舌で舐めとる。

「はぁ、はぁ、な、なんだ、いまの、はぁ、はぁ……」

「今のがイクってことだよ」

「イク……」

ぼんやりしながら呟いた魔王の顔を見て、勇者は愛おしそうにその頬を撫でた。

続

何も知らない魔王♀と魔王は自分のものだと思い込んでいる勇者♂＿体験版

2021年1月 21日発行

♡どん丸／がら堂

♡Twitter：@donmar18